

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画(4年に延長)の3年目)

1. 研究課題

3世紀東アジアの研究

A Study of East Asia in the Third Century

2. 研究代表者氏名

森下 章司

MORISHITA Shōji

3. 研究期間

2018年4月-2022年3月(3年目)

4. 研究目的

3世紀の東アジアは、中国における漢王朝の滅亡、三国への分裂をきっかけとして韓・倭の地域勢力が勃興、地域社会が独立性を強めた変動の時代であった。そうした状況を物語る資料として『三国志』をはじめとする文献があるほか、とくに近年は各地の考古資料も増大し、多くの研究成果が蓄積された。こうした3世紀における地域社会の特色や相互関係に関して、考古学・文献史・思想史の各分野と各地域の専門研究者による共同研究と議論を通じ、多角的な視点から検討をおこなう。①『三国志』烏丸鮮卑東夷伝のテキスト読解、②考古学による各地の生活形態・社会制度復元との対比、③各地域の独自性と共通性の比較、④地域間交流の検討などを軸として、東アジア世界において3世紀という時代が果たした意義について総合的な研究を推進する。

The purpose of this seminar is to clarify the regional features and the relationships among the societies of China, Korea and Japan in the 3rd century. In this age, after the collapse of the Han dynasty and the formation of Three Kingdoms, the tribal societies of Korea and Japan had developed to the Chiefdom stage. San-Guo-Zhi (三国志) describes these local societies and their changes in detail; also, the number of archaeological records of this area has been increasing recently. Through textual, historical and archaeological studies, we will point out the significant role played by local societies in 3rd century Asian history.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、4月から6月の研究会は休会とし、7月から研究会を再開した。研究会は、原則として分館大会議室での対面研究会とZoomによる中継とを併用したハイブリッド形式を採用し、合計8回を実施した。班員による研究報告では、後漢から魏晋のころに生じた墓制の変革や車騎行列の変化に着目し、考古・画像資料と出土文字資料・文献史料をもとに3世紀の中国における社会的・制度的変化を明確にしようとした。また、近年、曹操高陵や洛陽西朱村曹魏大墓から出土した石牌に着目し、いくつかの石牌銘文の釈読と考証を試みるとともに、その研究状況の把握と基礎的な整理をおこなった。そのほか、高句麗をはじめとする3～4世紀東北アジア地域の状況について、文献史料と考古資料の立場からそれぞれ検討会を実施し、さらに外部から講師を招いて東アジアの動物考古学・機織技術・葬具などをテーマに最新の研究成果を講演してもらい、中国・朝鮮半島・日本列島の研究状況について知見を深めた。

6. 本年度の研究実施内容

2020-07-10 漢魏の墓制変革：近年における曹魏大型墓の発見と関連するいくつかの問題
発表者 向井佑介 京都大学人文科学研究所

2020-10-30 紫綬について 発表者 森下章司 大手前大学

2020-11-13 遼陽と高句麗の壁画墓にみえる車騎行列 発表者 岡村秀典 京都大学人文科学研究所

2020-11-27 曹魏と高句麗：高句麗遠征と当該期の高句麗王系 発表者 井上直樹 京都府立大学

2020-12-11 日韓の動物考古学：日韓のト骨と犬骨の比較研究を前提に 発表者 宮崎泰史 大阪府立狭山池博物館

2020-01-22 日本列島における木槨の受容と展開 発表者 岡林孝作 奈良県立橿原考古学研究所

2020-02-05 古代日本とアジア諸国の機織技術 発表者 東村純子 福井大学

2020-03-05 馬具からみた3・4世紀の東北アジア：慕容鮮卑と高句麗を中心に 発表者 諫早直人 京都府立大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

向井佑介、岡村秀典、稲本泰生、宮宅潔、古勝隆一、古松崇志、藤井律之、高井たかね、目黒杏子

学内

吉井秀夫（文学研究科）、下垣仁志（文学研究科）、坂川幸祐（文学研究科）

学外

長友朋子（立命館大学）、井上直樹（京都府立大学）、諫早直人（京都府立大学）、金宇大（滋賀県立大学）、田中一輝（立命館大学）、大谷育恵（金沢大学）、山本堯（泉屋博古館）、馬渕一輝（黒川古文化研究所）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	10		1	1	1	68		6	6	6
		(2)					(14)				
国立大学	3	3		1			9		7		
		(2)		(1)			(8)		(7)		
公立大学	2	5		2	1	1	15		6	4	4
		(1)		(1)	(1)	(1)	(4)		(4)	(4)	(4)
私立大学	3	3					20				
		(1)					(6)				
大学共同利用機関法人	1	1					1				
独立行政法人等公的研究機関	3	3					5				
民間機関	2	2		2	2		10		10	10	
外国機関		1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
その他		1					4				
計	16	29	1	7	5	3	135	3	32	23	13
		(7)	(1)	(3)	(2)	(2)	(35)	(3)	(14)	(7)	(7)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

今年度の研究会を実施するなかで、近年発見された洛陽西朱村曹魏大墓と曹操高陵出土の石牌が、新たな研究対象・課題として浮かびあがってきた。これら曹魏大墓出土の石牌にはさまざまな副葬器物の名称・特徴・数量などが記され、考古学的に発掘された実物資料の少ない3世紀魏晋代の文物を検討する上で貴重な情報を提供してくれる。身分や制度に関わる器物名も多く含まれており、政治体制・制度が大きく変貌を遂げたこの時期の社会を理解する上でも重要な位置を占める。こうしたことから、今年度を実施した石牌の基礎的整理

をふまえ、石牌銘文—文献史料—考古遺物をつきあわせた総合的な検討を、次年度も研究班を1年間延長して継続的に実施していく計画である。さらに、今年度まで3年間をかけて実施してきた東アジア社会の多角的・総合的な検討成果を報告論文集にまとめるべく、個別のテーマにもとづいた資料集成・整理の成果報告や研究報告もあわせておこない、ゲストを招いての研究講演会も随時実施していく予定である。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度の研究期間終了後に、最終報告論文集の公刊、および学会でのシンポジウム開催を計画している。これまでに検討してきた都城・墓制・飲食・車馬・儀礼など各分野の研究をさらに発展させつつ、今年度から検討を開始した曹魏大墓出土の石牌銘文—文献史料—考古遺物をつきあわせた検討の成果を反映させることで、3世紀東アジアの文化・社会・制度の研究に新たな地平を切りひらくことができると考えている。